

## 同志社大学はあなたに何を期待しているか

奨励	井上 勝也 [いのうえ・かつや]
奨励者紹介	同志社大学名誉教授

皆さん、こんにちは。私は同志社大学文学部に一九五四（昭和二十九）年に入学し、その後大学院を経て教員になり、二〇〇四（平成十六）年に退職しました。学生時代を含めて丁度五十年間同志社と共に歩んできました。私の専門はキリスト教教育思想史で、創立者新島襄の生き方と思想を長年研究してきました。皆さんにとって、このような背景をもつ先輩が今から一時間ばかり「同志社大学はあなたに何を期待しているか」と題してお話したいと思います。私のお話の最後に、なる程同志社は我々にそういうことを期待しているのだということがわかりますよ。

このクラスの担当者である原先生にお尋ねしますと、このクラスは、一、二回生が中心で、とりわけ一回生が多いということをお聞きしました。私が五十数年前の大学一回生の時がそうであったように、高校時代までとは違って大学は学生を大人として取り扱い、あまりかまわず、つき離すようなところがあります。しかし新約聖書のマタイによる福音書七章七節に「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」というのがあります。受身ではダメ。積極的に求めなさい、と言っているのです。同志社大学もそうですよ。待ちの姿勢ではダメだということです。君たちは小学校時代から大学を目ざしてひたすら走ってきました。だから大学に入ったら一休みしようという気持ちになるのは自然かもしれません。私は一休みは結構、しかしいつまでも休んでいてはいけませんよ、と言いたいです。「時は有限」です。大学の四年間はあっという間に過ぎてしまいます。

## 時は有限

十二世紀の中国に朱熹（シュキ）という朱子学を大成した大学者がいました。日本にも大きな影響を及ぼしました。この朱熹が「少年易老学難成、一寸光陰不可軽」と言っています。その通りです。君たちのことを言っているのです。同じ朱熹が「謂（イ）うなかれ、今日学ばずとも来日有り」と、謂うなかれ、今年学ばずとも来年有り」と言っています。それでは何を学ぶのかという問題ですが、君たちは神学部、文学部、法学部、経済学部・・・私の時代は六学部でしたが、今は倍以上の学部があるのです。皆さんがどの学部にも属していても、狭く自分の学部に関心してもらえないことです。あらゆる学部が「人間とは何か」「国家とは何か」「何が真実か」を直接、間接探究しています。日本人であると共に、もし留学生がおられれば中国人、韓国人であると共に、地球市民（global citizen）とはどういう視点を持ち、どういう生き方、行動の仕方をするのが望ましいのか。戦争をなくし、平和を構築するにはどうすればいいのか、といった根源的な問題を考えてほしいのです。

## 汝自身を知れ

紀元前五世紀のギリシャのアテナーイにソクラテスという哲人がいました。彼は「汝自身を知れ」（Know thyself.）と言いました。君たちは自分探しの旅に出るといふ言い方をしましょう。自分とは何か。自分の長所、短所を知って長所を伸ばし、短所を除くことが大切です。ソクラテスは自分が如何に無知であるかを悟り、真知を求めなさい、と言っているのです。十八世紀から十九世紀にドイツに生きた文学者・政治家・J・W・ゲーテは彼の名著である『ファウスト』の中で、人間の心には二人の自分が宿っている。一人は崇高なものを探し求める自分と、もう一人は現世的で、官能的なものを求めようとする自分が宿っている。そして常に両者が争っている、と言うのです。また同じ『ファウスト』の中で「人間は努力する限り迷うものである」と言っています。人間は努力する限りますますわからなくなります。しかしゲーテはその次に努力して苦しんでいる人間を神さまはきつと正しい道に導いて下さる、とも言っています。

## 天は自ら助くる者を助く

十八世紀にアメリカの独立革命で活躍したB・フランクリンを知っているでしょう。たこを揚げて雷の本質を発見した人です。彼が「天は自ら助くる者を助く」（Heaven helps those who help themselves.）と言いました。他人に頼らずに、自分でコツコツ努力する人、試行錯誤をしながらも自分で問題を解決する、そのような人間に天は手を貸して下さる、と言うのです。God とは言わないでHeavenと言っている。彼の考えは広いですね。

一九六三年に暗殺されたアメリカの大統領J・F・ケネディーの弟でR・F・ケネディーは、兄の大統領を助け、黒人の公民権運動やキューバのミサイル危機に際してすばらしい手腕を発揮しました。彼も暗殺されましたが、このR・F・ケネディーが「今日を満足している者には未来はない」（Future will never belong to those who are content with today.）と言っています。若者は現状に満足してうたた寝をしてはいけません。現状に不満を抱き、現状を変えようとする理想主義者にならないと、本当の未来は来ない、と言っています。この頃「草食系」という言葉が流行しているようですね。同志社大学にはいろいろな留学制度がありますが、学生さんの応募が一時に比べて大幅に減ったそうです。これはR・F・ケネディーのいう現状に甘んじているか、しんどいことはやりたくないという人たちが増えたということですね。人間は本能的に怠惰な動物です。いつもうたた寝をしていたと思っています。時は有限、大学時代にやるべきことが沢山あります。やるべきことの一つは自分の視野を広めることです。地球時代の今こそ近視眼ではダメ！井の中の蛙では生きていけない。大海に出て、日本以外の国を見てきなさい。韓国の学生さん、中国の学生さんやアメリカで学んでいる留学生たちは目的意識をもって必死で勉強していることを私は知っています。幕末・明治の日本の留学生や第二次大戦後の留学生は本当によく勉強しました。同志社の創立者新島襄もその一人です。「艱難汝を玉にす」（Adversity makes a man wise.）という諺があります。困難に出会って苦しい体験をし、それを自分で克服することがあなたを成長させるのです。性格に角がとれて丸味ができ、包容力のある人間になるという意味です。ご両親から毎月十数万円の仕送りを受けている皆さん。ご両親は子どものために一生懸命に働いておられる。仕送りの金額を十万円に減らして、あと数万円をアルバイトで稼ぎませんか。自分で稼いだお金は大事に使います。お金の重みかわかるのです。親からの経済的自立が精神的自立につながるのです。近い将来君たちは親から完全に独立する時が来る。いや、独立しなければなりません。その日のために少しずつ自立する努力を始めませんか。

## 頼るのは自分

私は現在まで七十四年間生きてきて、その間太平洋戦争を小学校時代に体験しました。同志社大学の教員時代に大学紛争を体験しました。いずれも、私にとって大変な嵐の中の苦闘の日々でした。私の人生観の結論はね、結局頼るものは最後は自分だよ、ということです。四十五年間同志社大学で教壇に立ちましたが、その間学生さんに言ってきたことは「真実を見抜く目をもちなさい」ということ、親はいつまでも生きてはいない。お金も一晩でなくなるかも知れない、最後に頼るものは自分です。頼り甲斐のある自分になるということではなくて強い自分ということです。「嵐が吹いても吹き飛ばされない自分になりなさい」ということです。自分を磨くこと、精神を健全に機能させるには、虚弱な肉体ではダメです。強靱な肉体をつくることです。「健全なる精神は健全なる肉体に宿る」（A sound mind in a sound body.）とギリシャ、ローマの時代からいい伝えられてきた諺は真実です。生涯学習（life-long learning）です。死ぬまで自分を磨き続けること。これが大切なのです。以上のようなことを私は同志社に在職中あらゆる機会に若い学生さんたちに言ってきました。

さて、君たちは「同志社大学はあなたに何を期待するか」というテーマに答えているのかと首をかしげておられるでしょう。もう少し待って下さい。

## 新島襄の青少年時代

同志社を創立した新島襄は、一八四三（天保十四）年江戸で生れ育った安中藩の下級武士です。彼の青少年期はいわゆる幕末で、黒船、すなわちペリー提督が軍艦四隻を率いて浦賀にやて来たのが一八五三年で、彼の満十歳の時でした。翌年軍艦を七隻にふやし、江戸湾深く侵入し、空砲をぶっぱなして江戸幕府や江戸の庶民を震え上がらせた時は彼は十一歳でした。今から小学校の高学年の年齢ですが、当時の子どもはしっかりしていました。危機意識をもっていました。アメリカの軍艦が江戸湾を封鎖すれば、江戸に住む百万人の食糧が入ってこなくなる。艦砲射撃をされれば、江戸中が火の海になる。このような危機意識を新島を始め当時の人びとはもっていました。一八三九年から四二年のアヘン戦争の二の舞が日本で始まるという危機意識です。新島は数えの十五歳で元服をし、翌一八五八（安政五）年安中藩の尾崎直紀に次のような手紙を送っています。これは漢文で書かれていますが読み易くしました。読んでみます。

## 今不学恐失時

「今にして学ばずば時を失わんことを恐る。故に儒家に託して書を学ばんことを欲す。（中略）若し乱に及ばば、敬幹は書を学ばんこと能はず。今にして学ばずば時を失わんことを恐る。宜しく敬幹をして入塾し、矇目（もうもく）（はつきりみえない眼）を開かしめよ。是れ僕の赤心を以て願う所也」

今不学恐失時、故託儒家欲学書、若及乱敬幹不能学書、今不学恐失時、宜使敬幹入塾開矇目、是僕之以赤心所願也（『新島襄全集』3、四一―五頁）

敬幹というのは、新島の元服時の烏帽子（エボシ）名です。一八五八年というと、日本の中も外も嵐のような状態になっていました。国家存亡の秋（トキ）です。このような状況の中で新島は座視傍観することができませんでした。そこで彼は、「どうか蘭学塾へ行って、外国のことを学ぶ時間を与えて下さい」と安中藩の上級武士に懇願しているのです。彼は江戸で内外の情報を集めて、何とかしなければ日本がダメになる。清国のように西洋列強に呑み込まれてしまうといった、あせりにも似た気持ちをこの手紙に託しているのです。一八六〇（万延元）年十七歳の新島はオランダ語で天文学や物理学の初歩の本を読み、江戸の築地にあった幕府の軍艦操練所に入って高等数学と航海学を一年十カ月ぐらい学んでいます。一八六三（文久三）年、この頃二十歳の彼は、海外の動向に対して強い関心を持ち、清国から輸入される書物をむさぼり読んでいます。中国語は漢文ですから、当時の武士はつづらつ読めた訳です。

## 『連邦志略』

新島が読んだ書物の中に『連邦志略』がありました。アメリカ合衆国の歴史や地理や文化を知る上で便利な本です。彼はこの本を読んで「頭から脳髓がとろけ出る程驚いた」(Life and Letters, pp. 3-4)と書いています。まずアメリカには授業料を払わなくてもいい学校があって、貧しい子どもたちも学び、彼らは読み・書き・算ができるというのです。日本の義務教育制度は一八七二(明治五)年以降ですから、アメリカはすごい国だと思ったのでしょう。彼はまた国家の最高責任者である大統領を国民が選ぶということにも驚きました。彼が一番驚いたのは一七七六年の独立宣言文の要約を読んだことです。日本では初めに国家ありきで、国民は国家に黙って従う弱い立場です。ところが、アメリカという国は初めに国民ありきで、国民が自分たちの都合のよい国家や政府をつくることができる。そして政府が国民にとって都合の悪い政治をおこなう場合、そのような政府を改廃することができるという革命権が保障されている。新島が脳髓が頭からとろけ出る程驚いた理由は上記のような点にあるのです。彼は太平洋の向うにそんな国があるのだ。是非自分の目で確かめてみたい。そして日本の近代化に役に立たいという気持ちになりました。

## 新島の密航

一八六四(元治元)年、二十一歳の新島は国禁一海外渡航禁止の国の法律を破って函館から密航を企て、一年かかってアメリカのボストンに着きました。当時幕府の法律では密航がばれれば死罪ということになっていましたので、彼は大変危険な橋を渡ったわけですが、二十一歳といえば君たちと殆んど変わりません。彼は草食系の若者ではなかったのです。

## クラークに学ぶ

新島は一八六五年七月、南北戦争後のボストンに着き、一八六七年九月マサチューセッツ州アモストの町にあるアモスト・カレッジに学ぶのです。彼は札幌農学校にやってきたW・S・クラーク教授に化学(chemistry)を学んでいます。クラークはアモスト・カレッジの卒業生で卒業後ドイツのゲッティンゲン大学に留学し、隕石の化学的分析で博士号をとり、帰国後母校の教授になりました。新島がアモスト・カレッジに入学した時、クラークは同じ町にできたマサチューセッツ農科大学の学長になっていましたが、非常勤講師として母校に教えに来ていたのです。クラークが明治九(一八七六)年七月北海道にやってきて、札幌農学校でたった八か月しか教えなかったのに、あれほど大きな教育的感化を与えました。明治十年四月、札幌郊外の島松で見送りに来ていた農学校一期生たちに握手して、“Boys, be ambitious!”と馬に鞭打って雪原のかなたに消えて行ったという話は聞いたことがあるでしょう。

## クラークが同志社に来た

このクラーク先生が実は京都に来て今出川キャンパスを歩いているのですよ。それは明治十年五月上旬です。同志社英学校の新島校長は当時十字砲火をあびていました。八方塞(フサ)がりでした。京都府から同志社英学校でキリスト教を教えてはいけないと言われ、宣教師たちはキリスト教が教えられないことに大きな不満をもっていました。京都のお寺や神社(稲荷さん)はキリスト教が京都に入ってくることに強く警戒し、同志社の動静を常に監視していました。このような状態で新島はいつのことも同志社英学校を閉校しようかと悩んでいた時にクラークが京都にやってきて、彼を励ましたのです。そしてクラークは当時あった二、三の木造の校舎に何がしかの寄付をして、横浜経由でアメリカに戻りました。彼はアモストの町の教会でアモスト・カレッジの卒業生である新島襄が京都で大変困っているので寄付をして励まそうとて、お金を集め、百ドルを新島のもとに送ってくれました。

## クラークのambitious

私がここでクラークの話をしているのはクラークと新島の間に教育観に共通点があり、とりわけクラークが一期生との別れぎわに“Boys, be ambitious!”といったこのambitiousに私はこだわっているのです。これは若者よ、野心をもて!といったのではなく、高い志をもて!といった私は解釈します。それはクラークの生き方、思想を調べた上での結論です。先程新島の青少年時代の話をしましたが、彼の生き方もambitiousでした。大きな志をもって困難をものともせず突進した青春でした。決して自己中心ではありませんでした。自己の利益の追求のためではなく、社会のため、国家のためという視点があったと言えます。私が四十年間新島襄を研究し続けて、彼の生き方に魅せられるのは、彼の高い志とその志を実現するために万難を排して取り組む姿勢です。彼は四十六歳十一月で亡くなるまでambitiousであり続けました。

同志社の創立者新島襄は学生一人一人を大切にされた教育者でした。卒業生が困っていたら喜んで手を差し伸べる教育者でした。その例を示すよい手紙がありますので、ご紹介しましょう。蔵原惟郭(コレヒコ)という同志社英学校の中退者がアメリカに留学して働きながら神学校への入学のチャンスを探っていました。しかし彼を受け入れてくれる神学校が見つからない。そこで二回目の欧米旅行でアメリカへやってきた新島に手紙を書き、窮状を訴えたのです。それに対する新島の返答が今から読みます手紙です。この手紙は蔵原宛のもですが、今私の話を聴いている皆さん一人ひとりに向って言っているような内容です。新島は自分の人生観を述べて、あなたが今何をすべきかを懇々と説いているのです。一寸長いですが、読んでみます。格調高い文章です。

## 蔵原惟郭宛の手紙

華墨(カボク)拝読仕候、陳者(ノブレバ)小弟も御存之通兎角多病、クレフトン・スプリングより帰坡仕候より、尚氣候之宜しからざるよりト先南方二出懸殆一ヶ月余所々遊歴経過し、幾分か先途之目算なし参り、エール大学ニも逗留ボルト先生二面会仕候処、彼エール神学校ニハ大学科コレジコースを卒ハサルニアラサレハ入校ヲ許サス、又扶助ヲ与エス、右故該校入学之希望は御絶可被成候、小弟別ニ計ル処あり、パンゴウ「パンゴウハメイン州ニアリ、曾テポンド氏ノ授業セラレシ神学校ナリ」カ又ハシカゴ之神学校ニハ特別課あり、是より此課ニ入ルノ策をなすべし、此両策中一ツハ成ルヘシト希図仕居候、当時御労働中基ツラキこともあるべし、然シ古来大事業を為せし人物中大名カ黄金家に生れし者甚稀ナリ、労働ハ人生之良業ナリ、苦難ハ青年之業を成スノ楷梯ナリ、小弟昔時労働せし事一年ヨ、又人之糞汁迄モ洗ヒシ事アリ、是等之事ハ今日トトリ小弟ヲ益スル殊ニ甚ダシ、愛兄ヨ忍ブシ、忍ブシ、疲劣ク兄ヲシテ眠ラシムベシ、人ヲシテ初メテ黄金ノ貴キヲ知ラス、乞ヒサスレハ事容易ニ成ルヘシト思ハラルニハ甚固候、兄ヨ忍ブシ、落胆スル勿シ、労働ハ本國ヲ発スル時ノ覚悟ニアラスヤ、坐して人ノ助けヲ受ルヨリモ勞シテ自ラヲ助クノ貴キニ如カス、人生事ヲ為サヤ只々学問ノ博キニヨラス、一片不撓ノ鉄腸ヲ練磨スルニアリ、兄ヨ此理ヲ知り賜フヤ否、小弟滞在中再ヒモデー氏二面会スルノ機ヲ得ハ兄ノ為ニ計ル処アルベシ、真実誠忠勉勵等ヲ以テ宜シク兄ノ実働ヲ願フベシ、米州人物乏キニアラス、何人カ克ク兄ヲ知ルモノアラン、勉コヤ、忍ヘヨヤ、小弟兄ノ為ニ祈テ急ラサルベシ、不宣

蔵原惟郭宛書簡 明治十八年五月三〇日『全集』3 三四七—八頁

さて、この蔵原惟郭はその後、バンゴウ神学校、アンドーヴァー神学校に学び、スコットランドのエディンバラ大学でも学び、後年慶應義塾の教授、さらに国会議員として活躍しました。

新島襄は、そして同志社大学は今あなたに何をしてほしいと考えているか、どのような自己教育をすべきだといっているか、何を期待しているか、少しは見えてきたでしょうか？

## 一国の良心になれ

新島は生前同志社英学校を同志社大学に昇格することを考え、明治二十一(一八八八)年十一月「同志社大学設立の旨意」を全国のマスコミに発表し、その中で次のように申しています。「一国を維持するは決して二三英雄の力に非ず。實に一国を組織する教育あり、知識あり、品行ある人民の力に抛らざる可からず。是等の人民は一国の良心とも謂ふ可き人々なり、而して吾人は即ち此の一国の良心ともいふべき人々を養成せんと欲す」(『全集』1、一四〇頁)。新島は同志社に学ぶ学生に、教育あり、知識あり、品行ある、即ち高い道徳性をもって行動する人間になってもらいたいと考え、そのような人を「一国の良心」と呼んでいます。一国の良心とは何が善であり、悪であるかを自らの力で判断し、その価値規準に従って行動する地方や国家のリーダー的人間のことです。自分の国の現状と将来を考え、今の言葉でいえば地球全体のことも考え、地球上から温暖化や戦争や貧困やテロの問題をなくし、地球上の全ての住民が平和のうちに生活することができるように、政治に、経済に、教育に、福祉に、あらゆる分野で「地の塩」として、「世の光」としてリーダー的役割を果たす人物の養成を同志社でやるのだと新島は考えていました。彼にとって良心(conscience)というのはキーワードです。良心という概念は儒教にもありますが、新島はキリスト教の良心を考えていました。彼は「基督教主義は実に我が青年の精神と品行を陶冶する活力あることを信じ、此の主義をもって教育に適用し、更に此の主義をもって品行を陶冶する人物を養成せんと欲するのみ(同上、一三九頁)と申しています。良心はこのキリスト教主義の中核概念でありまして、原先生の授業の根底に流れていますから、しっかり聴いて下さい。

## 新島の遺言

新島は大学昇格を目前にして、明治二十三(一八九〇)年一月に亡くなりました。彼は死の直前に次のような遺言をしています。「同志社教育の目的は其の神学、政治、文学、科学等に從事するに係らず、皆精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て国家(国家)に尽すべき人物を養成するを務む可き事」(『全集』4、四〇三頁)。彼のいう精神活力あり、真誠の自由を愛し、以て国家に尽すべき人物の養成は、大学四年間の自己教育によって可能になると考えます。

ここまでお話を進めてきて、同志社大学はあなたに何を期待しているかをおわかりいただいたでしょうか。まず「時は有限」であることを自覚し、日々問題意識をもって積極的に生きること、「人間とは何か」を探究し、only one earth, かけがえのない地球のもろもろの困難な問題をなくすにはどうすればよいか、日本が現在九百兆円近い借金をかかえています、国家財政の破綻を避けるにはどうすればいいのか、このような重要な問題を考えるヒントを同志社大学のあらゆる授業やチャペル・アワーや講演会などから得られるのです。どうぞ積極的に授業に参加し、クラブ活動も積極的にやり、留学もして、自己教育に励んで下さい。明確な目標をかかげ、視野を広くもって、多面的、立体的なものを見方、考え方が重要です。以上のようなことを同志社大学はあなたが一人ひとりに期待しているのですよ、と申し上げ、今日の私のお話を終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。

二〇一〇年六月二日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録